



薬局ポートレート

vol.49

たけの調剤薬局

(茨城県結城郡八千代町)

編集部



服薬は介護の一部分

たけの調剤薬局は5人の薬剤師が勤務し、積極的に訪問薬剤管理指導を行っている。現在、月に約30人の患者宅を訪問する。薬剤師・事務員は全員、福祉用具専門相談員の資格を取得し、患者に合ったきめの細かいアドバイスを行っている。薬剤師のうち2人は介護支援専門員の資格を持っており、患者のケアプランの作成を行うなど仕事の幅は広い。2000年に介護保険制度が始まってから約7年が経過したが、施行後数

年は制度の理解が乏しく利用者も少なかったという。「介護保険制度とはどういうものなのか、どのようなサービスを受けられるのかなど多くの人に説明しました」と薬局長の中曽根英明氏。口コミなどから少しずつ介護保険の利用者が増加した。

中曽根氏はケアプラン作成を進めるうちに、「家庭の事情を知ることが最も大切。服薬は介護の一部分でしかない」と感じ、薬局で服薬指導を行う時も患者がどのような生活をしているのか重視するようになった。十分な聞き取りにより患者の生活が

見えてくることで具体的なアドバイスが可能となる。例えば、昼は寝ていることが多く、薬を飲み忘れるという患者の訴えを医師にフィードバックした結果、1日3回から2回へと処方変更された。その後は薬を飲み忘れることがなくなり、コンプライアンスの向上につながった。

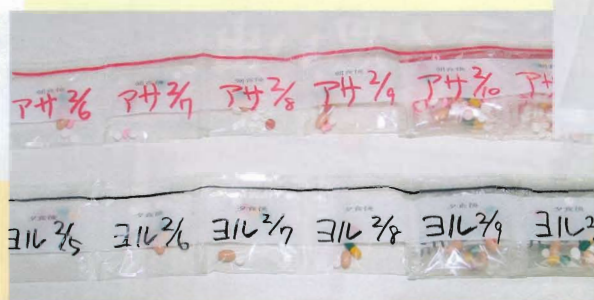


工夫を凝らす薬剤管理

薬局窓口ではしっかりしているように見える高齢の患者も自宅での薬剤管理が正確にできていないとは限らない。脳梗塞やアルツハイマーなどの持病がある患者も多く、患者宅を



散剤を入れる瓶には、薬の箱から切り取ったロゴを貼り付けた。字の形やデザインが違うため、取り違いの防止に役立つ



薬を入れる袋、分包紙に書く文字の色などはすべて統一している

訪問すると、分包紙を開けるときに飛び散った錠剤が部屋にそのまま落ちていたり、朝飲む薬の箱に夜の分が混ざっていたりすることもある。訪問で明らかになった問題点は医師にフィードバックするほか、患者と話し合い、分包紙に日付を書いたり、薬の箱の文字を大きくするなど個々に合わせた工夫を行う。「アサ2/6」や「アサ」など、患者によって分包紙に書く文字が異なるため、薬剤師が記入する時に間違えないよう患者ごとに注意点をまとめた紙を作成し、それを確認しながら調剤を行う。「ただ薬を渡すのではなく、どのようにすれば毎日続けて飲むことができるのかを常に考え、患者さんと話しています」と中曽根氏は言う。また、

薬剤師が一生懸命服薬指導を行うほど、本当は困ったことがあっても心配をかけまいとしたり、高齢者扱いされることを嫌い「大丈夫」と言い切る人もいる。しかし、そこで終わってしまえばコンプライアンスの向上につながらない。そのような場合には、一包化した実物や、飲み方を分包紙に書き入れたほかの患者の薬を見せ、「このような方法もありますから、気軽に言ってください」とさりげなく言う。そうすることで「自分だけじゃない」ことに安心し「お願いしてみようかな」と思う患者もいる。患者の性格や家庭環境なども勘案し、臨機応変な対応を心がけている。

学会発表は薬局全員で取り組む

同薬局では、1995年から毎年、日本薬剤師会学術大会でポスター発表を行っている。「小児用製剤の味付けと配合変化」や「服薬指導とコンプライアンス」、「医療費節減のために薬剤師ができること」など内容は幅広い。「ポスター発表の利点は見に来た人から生の声が聞けること」と薬局開設者の竹野信吾氏。意見や感想を聞くことで新しい発見があり、その後の業務に役立つことも多い。努力を怠らない姿勢はスタッフ全員に共通しており、地域密着型の薬局として、患者だけでなく医師や看護師などからの信頼も得ている。



サポーターは着用しないと大きさがわかりづらいため、サンプルを置く

左上に貼られている紙は規格違いによる調剤過誤を防ぐ工夫。例えば、写真右下のベイスン錠0.2は同薬局に規格違いで0.3があるため赤字で、ベイスンOD錠は同薬局で採用していないが同一名薬剤であるためOD0.2、OD0.3と青字で書いてある

